ようざん認知症介護事例発表会

通所

2020年9月3日

目次

笑顔で１００歳を迎えたい　　スーパーデイようざん双葉　　p.1

『お風呂なんて嫌!!』～諦めず、可能性を信じて～　　デイサービスようざん並榎　　p.4

「一人は寂しいよ・・・」～安心できる場所を求めて～スーパーデイようざん栗崎　　p.9

「もう帰っていいんかね？早く帰りたいよ」　　スーパーデイようざん貝沢　　p.13

その人らしさを活かしたケア　　スーパーデイようざん小塙　　p.16

「どこに行くのか分からないけど、まあいっか！」　スーパーデイようざん石原　　p.21

『笑顔のさきに……』　　デイサービス　ぽから　　p.25

笑顔で１００歳を迎えたい

スーパーデイようざん双葉
発表者：櫛田　千恵子
三村　栄子

＜はじめに＞

自宅の窓から庭に咲く四季折々の草花や飛び交う鳥の動き。そして形が変化する雲を眺める事が大好きなＡ様。

持ち前の明るさとユーモアはいつも周囲を和ませてくれる。何より笑顔がトレードマーク。

そんなＡ様に少しずつ変化が表れたのは１００歳の誕生日まで、あと６か月に迫った８月のこと。下肢筋力の低下とトレードマークの笑顔が徐々に消え、表情も乏しくなった。

今まで通り自宅での生活を続け笑顔で１００歳を迎えたい。

そんな、家族の願いに何としても答えたい。答えなければならない。そんな強い使命感にかられた私たちの取り組みを発表する。

＜事例対象者紹介＞

対象者：　Ａ様
性別：　女性
年齢：　９９歳
介護度：３（昨年９月より要介護５）
既往歴；元来健康で病気らしい病気はしたことがない。９３歳ころ物忘れが始まり、アルツハイマー型認知症の診断を受ける。

＜生活歴＞

Ａ県Ｂ郡で５人兄妹の末っ子として生まれる。結婚前は県の林野課に勤務。その頃より野鳥や植物に興味を持つ。

特技は和裁。芸者の着物を縫うほどの腕前。結婚しＣ市に居を構え３人の子供を育てる。４０歳のころ事務員として１０年間勤務。退職後は夫婦で孫の面倒をみて、子供たちを支える。平成２６年、長年連れ添ってきた夫が他界したが、落ち込むことなく安定して生活できていた。

現在次男夫婦、孫と同居。隣に長男夫婦。Ｄ市に長女が暮らしている。母には子供たちの面倒を見てもらって今がある。恩返しのつもりで、出来ることはサポートしたい。と家族関係は良好である。

＜表面化する問題点＞

1. 下肢筋力の低下により立位が困難となる。それにより、入浴、トイレでの排泄が難しくなる。
2. 意欲低下により、自ら会話をする事がなくなった。
3. 食事量が減少する。

＜取り組み＞

A 様にとって何が良いのか、どうすべきなのか職員間で意見を出し合い話し合った。
しかし、どんなに思いをめぐらせても良い答えが見つからない。
あせる私達。「兎に角やってみようよ！！」前を向いて GO!
下肢筋力向上のため出来ること。
椅子に座り足踏み。
A 様「いてぇ～～～～～～～！何するんだ」
力強い声がホール内に響き渡った
職員一同「…」
このみなぎる大声こそが A 様の元気の証。力強さこそ意欲向上につながるはず。
かすかに光が見えて来たのを感じた。
そんな思いと裏腹に筋力低下に歯止めがかからない。食事面においても、むせ込むようになり誤嚥の心配もある。
常食からお粥・刻み食としたが、食事量は一向に増えない。
家族の希望もあってペースト食へと変更したが食が進まず残すことも多くなり体重も減少していった。
入浴やトイレでの大声は日常的になり生活のしづらさは大きくなる一方で、何度も立ったり座ったりを繰り返すことが、体の負担を大きくしている。疲労感は言葉に出さなくも表情から推測できる。
大声を出すのは「つらい！！やめて」のサイン。
今まで出来ていたことが出来なくなった…
家族がこうあってほしいと思うことが、必ずしも A 様の望むことではないかもしれない。
目指したいものと現実とにあるギャップ…。
もう一度デイでの生活を見直してみる。
心身ともに癒されるはずの入浴が A 様にとって苦痛となっている。ならば、解決策は何か。状況をみて手探りで模索した。
着脱や洗い場までの移動は、車いすを使用し職員 2 名体制で何とか可能であった。問題は浴槽への移動である。入ることに関しては職員 2 名で対応可能であるが、深さのある浴槽から出ることが困難で、手すりに掴まってもらいそこから足を出す動作が難しく、浴槽台を使用し段差を軽微にしても足が上がらず苦痛の表情を見せる。家族に

確認し、シャワー浴で対応することになったが、季節が寒い時期と重なり、ヒートショックなどが心配される事態となった。
そのころ介護度も5と変更になったことで、視点を変えて論じた結果、デイでの入浴を取り止め訪問入浴の案が浮上した。
早速管理者に報告し、ケアマネ、家族、医療従事者を交え担当者会議を経て、訪問入浴が決定となった。
週3回の利用を2回とし、訪問看護を追加した。医療面への、充実を考えてのことである。

＜考察・まとめ＞

デイの入浴中止が功を奏した結果となった。

今迄入浴に時間を取られ参加できなかった健康体操や脳トレへの参加が可能となり、A様のペースで手指を動かしたり、難読漢字や計算問題に取り組むことで、心身の機能維持や意欲向上に繋がっている。

口腔体操の参加で職員が介助していた食事も、自ら箸やスプーンを口に運び自力摂取。ゆっくりではあるが、ほぼ毎回完食している。水分もストローを使い大方400～500 cc位が摂れている。

乏しかった表情が一段と明るくなり、会話も少しずつ増えてきた。

お得意のギャグも飛び出しA様らしさが戻ってきた。

何より笑顔がGOOD！！すごいね、A様！！

＜終わりに＞

今迄通りの生活を続けるために下肢筋力の向上に努めてほしいとの家族の願いを叶えることは、難しく歩行や立位は今通りとは行かなかった。

しかし、明るい笑顔こそがA様本来の姿。主介護者の息子さんは今とてもいいリズムで生活できている。このまま自宅への生活を続けたい。よろしくお願いします。と言葉をいただいたその表情は柔和であった。

これからも家族の介護負担の軽減を図り自宅での介護が安心してできるように支援を続けたい！！

A様、本当に本当に笑顔で100歳、おめでとうございます！

ご清聴、ありがとうございました。

『お風呂なんて嫌!!』～諦めず、可能性を信じて～

デイサービスようざん並榎
清水幸子

【はじめに】

「こんなお風呂入りたくない！」「だまして入れさせて！金儲けしている！」「もう二度と来ない！もう帰る!!」

今回紹介する A 様は普段は温厚ですが、入浴になると様々な理由をつけて何としてでも入らないという強い入浴拒否があり、まともに入浴ができない状態です。暴言も多くあります。周囲の利用者様も巻き込みホールは不穏な雰囲気になり、入浴拒否がない利用者様も入浴を渋ってしまう事態に。そして入浴以外の時間も周囲の利用者様から孤立するようにもなりました。「A 様にデイサービスで入浴してもらうことはもう無理かもしれない…」と諦めかけていました。自宅でも入浴拒否がありご家族も大変苦労されていました。

今回の事例の取り組みは失敗に終わるかもしれない…でも A 様とご家族のためにこの状況をなんとかいしたいその一心で、ご家族にもご協力していただき、職員皆でアイディアを出し合い様々な工夫を試みました。その内容について紹介致します。

【利用者様紹介】

・A 様　８９歳　女性　要介護２
・週 4 回デイサービス利用、ショートステイ不定期で併用
・既往歴　アルツハイマー型認知症、抑うつ状態、高血圧症、腎機能低下、水虫
・日常生活動作(ADL)に問題なし
・服薬状況　朝食前メマンチン塩酸塩 OD 錠 200 ㎎ 1 錠とアムロジピン錠 5 ㎎ 1 錠、寝る前エチゾラム錠 0.5 ㎎ 2 錠

(生活歴)

・7 人兄弟の長女として高崎市で生まれる
・結婚後夫の転勤で転居していたが、子供のころから馴染みの深い高崎市 B 町に定住
・現在は長男夫婦、孫と同居。日中は長男の嫁と過ごしており、嫁に対して依存が強い
・昔は社交ダンスや旅行を楽しんだ
・繊維の卸し会社で勤務していたことがある

(性格)

・短期記憶障害が顕著に見られるが入浴以外では温厚な性格で、職員に対しても『こんなおばあちゃんを面倒見てくれてありがとう』との発言や自らハグや手をつないだりするスキンシップも多く社交的で感情豊か。最近では思ったままを発言することが多くなり感情の

コントロールが難しくなってきている
・ご家族も気が付かないようなきれいなもの(花など)にすぐ気が付く
・昔からお風呂はあまり好きではない
・花やきれいなもの、かわいいものが好き、おしゃれ、自身が写っている写真が好き
・席・衣服・天候のことなど不安になりやすい傾向

(利用開始～現在の様子)
H26 年 6 月利用開始当初から現在まで来所拒否なく、朝のお迎え時も『遠くまで迎えに来てくれてありがとう』と感謝の言葉が多く、レクリエーションやゲームでも『出来ない』と言いながらも意欲的に参加されている。

入浴

利用当初は自宅にて問題なく入浴できていた為、家族よりデイサービスでの入浴の希望はなかったが、徐々に自宅での入浴時拒否が強くなり H29 年 12 月より家族の希望により週三回入浴施行。入浴拒否の傾向はあったが職員の説明で入浴出来ていた。その日の様子でスムーズに入浴できる時や入浴後は喜んでいる時もあった。洗髪の拒否も時々あり。徐々に毎回入浴拒否が強くなり、お風呂という言葉にも敏感で『風邪ひいちゃう』『昨日入ったから』『弟のうちで入るから』など様々な理由をつけて拒否をされ入浴中止することが多くなった。『こんなお風呂嫌だ』『もう帰る！』と暴言が強く出るようになる。ホールで『毎日家で入ってるのに。困った困った』『お風呂に入れさせて、儲けている』など他者を巻き込むようになり他の入浴拒否のある利用者様も A 様の影響を受け不穏になり入浴ができなくなったり、入浴拒否のない利用者様も入浴を渋るようになる。入浴後もしばらく感情を引きずり被害妄想の症状が強くあり、デイでの入浴は困難になったため昨年 11 月 21 日よりしばらくは自宅にて入浴を行ってもらった。自宅でも拒否は強く、『もう寝る！』と強い口調で拒否あり『デイで毎回入浴している』と話しているとのこと。家族の負担が大きいため今年 6 月よりデイサービスでの入浴を再開し、試みる。

健康面

服薬されており血圧は安定している。現在歯の調子が悪く歯科受診を継続している。柔らかいごはんも『固くて食べられない』との発言が多い。今年 4 月体調不良にてかかりつけ医院を受診。腎臓数値が悪く腎機能の低下あり。再検査にて腎臓数値は少し良くなっていたがひどい貧血あり、一か月に一度造血剤を注射している。将来的に本来は透析が必要だが高齢のため無理に透析をするより自然に任せ様子を見ることになった。むくみや吐き気に注意が必要。普段水分の摂取は少なめの為、デイでは昼食の味噌汁を半量に変更のみで対応。自宅にて食事療法を行う。
皮膚状態は入浴後足趾間に水虫薬を継続使用している。

他には…

・衣服調整が難しく上着を気にしたり、夕方になると帰り時間を気にしたり、繰り返し確認される

・以前から他の利用者に対して優しく思いやりのある会話が多かったが、短期記憶障害により同じ話を繰り返すことが多くなったため、認知症のない他者に理解されず交流が難しいときがある

【課題】

① A 様はなぜ拒否をされるのか？A 様が安心して入浴できる環境、声掛けとは？

② 入浴以外も一日を通して A 様が安心して楽しく過ごせる時間を増やし、職員との信頼関係の再構築を図る

【工夫　その 1】

声掛けの回数を減らす

・入浴拒否の明確な原因は掴めていないが、家族からの情報とご本人の発言から入浴自体に嫌悪感や不安感がある、ネガティブなイメージがある、体調が優れないことも影響していると仮定する。今まで”入浴の声掛け誘導頻度が増えていくと拒否も強くなり入浴できない“この繰り返しになりがちで久しぶりの入浴だとすんなり入れることができた経緯から、週一回のみ入浴の声掛けを行い他の来所日はあえて入浴の声掛けは行わない。また無理強いをすると嫌な感情が強く記憶され拒否がさらに悪化する可能性があるため、拒否が強いときは何度も声掛けはせずに中止する。まずは拒否の気持ちを和らげ A 様の入浴に対するイメージの改善を図る。

腎機能低下や高血圧症のため、拒否が強い場合などは特に体調に変化がないか注意する。

【工夫　その２】

入浴に対するイメージ、環境を変える

・脱衣所、浴室に好きな花を飾る、リラックス音楽を流す、変わり湯(バラ湯、森の香りなど)を用いて環境を変えてみる

【工夫　その３】

入浴時の声掛け、誘導方法を工夫

① 入浴拒否の傾向のある他の利用者と影響を与え合わないよう、ホールから別の場所に誘いだし、入浴の声掛けを行う

↓

② A 様が納得する、安心するキーワードで丁寧にわかりやすく可視化し説明、傾聴
毎回同じ職員の声掛けにならないように職員で協力して声掛けを行う

重点　A 様を心配している、良くなってほしいという前向きな声掛け、体調不安を訴える A

様に響くような説明

・お嫁さんに書いていただいた手紙を見せ説明
・水虫の疾患があるため、入浴することにより水虫が改善することを伝える
　水虫の悪化時と改善後の写真を見てもらう
・「コロナウイルスが流行っているのでからだのチェックを頼まれています」「体重測定しましょう」など、A 様に納得していただきやすい『病院』や『お医者さん』などのキーワードを使い説明

③ 入浴中も無理強いはせず、丁寧に傾聴
飾ってあるお花や変わり湯に気持ちが向くように対応、会話で気持ちをほぐす、入浴剤を選んでもらうことにより、『入れさせられる』から『自分で決めて入る』感覚を感じていただく

④ 入浴後も『気持ちよかった』と感じていただけるよう、香りのよいクリームでハンドマッサージを行いリラックスしていただき、ポジティブな感情が残るようにアプローチ。

【工夫　その４】
・自己紹介ノートを作成→名前と写真、自己紹介で安心して会話を楽しめるよう試みる
・ようざんアルバムを作成→好きな“写真”を用いて他の利用者や職員と楽しい思い出を共有、忘れてしまっても写真を見て思い出し安心していただく

【工夫　その５】
帰宅前や衣服のことでも安心できるような工夫をする(案内札の使用、衣服の預かり方を工夫)

【工夫　その６】
ダンスパーティーを実施→昔を思い出し皆と楽しむことにより、自信を取り戻すきっかけを作る

【結果】
入浴の継続は難しいかもしれないと予想しておりましたが、六月から三か月間無理なく週一回の入浴を継続できています。また多い時には週二回無理せず入浴できるときもあります。『お風呂は家では毎日入っているのに』と拒否の傾向はまだありますが、強い拒否は少なくなりました。以前は入浴出来ても納得されない様子でしたが入浴の説明に納得したご様子で入られることが多くなりました。説明を口頭だけでなく、水虫の写真などを用いて可視化することにより理解していただきやすくなり有効でした。職員の『心配している。A 様に良くなってほしい』との想いに耳を傾けてくださるようになりました。
また A 様が入浴を喜んでくれることは難しいと予想していましたが、最初は戸惑いがあっ

たものの現在では入浴後『こんなこともしてくれるの。ありがたいありがたい』と喜びの発言もあり、ネガティブな感情を引きずりにくくなりました。また『花がきれいだね』『コースターすてきだね』と小さな変化に喜んでくださり前向きな発言も多くなり、入浴したことは忘れてしまっても感情の記憶は残っているように感じます。
落ち着いて入浴できるようになったため、ホールでも周りを巻き込むことが徐々になくなり、A 様の穏やかな雰囲気に他の利用者様も影響されています。
ご家族の定期的な受診による貧血の改善、毎日の食事のサポートにより体調が改善されていることが入浴にも大きく影響していると思われます。入浴できることにより、皮膚観察や処置も行えるようになり、両足の垢の汚れもきれいになっています。
　入浴以外では、『奥さんもダンスやるの?』と他者に対して積極的に声を掛け、気の合うお話相手も増えました。帰宅前や衣服の調整の工夫でより快適に落ち着いて過ごしていただけるようになりました。ダンスパーティーでは、笑顔で職員の踊りに合わせて積極的に一緒に踊ってくださり、社交ダンスでは昔躍ったステップをしっかりと覚えており職員をリードしてくださりました。自信に満ち溢れた踊りにとても感激しました。また教えてくださいねと声をかけると、『できないよ～』と言いつつも、満面の笑みを見せてくださりました。

【考察・まとめ】
入浴できない事は利用者様にとっても、家族の方にとっても悲しいことです。
A 様の強い拒否で職員も諦めかけていましたが、私達介護職は、どのような拒否があってもまずは諦めてはいけない、当たり前のことを当たり前にできる工夫こそが、ケアの専門職として大事な姿勢であり、家族から託されていることを忘れてはいけないと痛感しました。

また、拒否いう状態はマイナスに捉えがちでしたが、継続的に色々な視点から拒否の背景を探り、気持ちに寄り添うことで、A 様の可能性を広げ、より良いケアに変えることのできる大事な意思表示ということを改めて教えていただきました。
現在は入浴できるようになり、介護職としての大きな喜びとなり、A 様のお気持ちにも変化があるかもしれません。
体調面も日々変化していきます。A 様の気持ちに気づけていない部分もあるかもしれません。これからも A 様からの大事な意思表示を見逃さず、「諦めない思いやりのケア」を続けていきたいと思います。

「一人は寂しいよ・・・」～安心できる場所を求めて～

スーパーデイようざん栗崎
発表者：渡辺恵美
植原さおり

【はじめに】

適応障害を持つ認知症の利用者様が被害妄想やその他の周辺症状に苦しみながら利用ができなかった。被害妄想・混同・混乱・不穏・不安などによる身体へ及ぼす変調が体調の悪化へとつながり、来苑したいと思いながらも来苑することができない状況を乗り越え、定期利用を実現できた事例を紹介する。

【利用者様紹介】

氏名：A 様　　性別：男性　年齢：89 歳
要介護度：要介護 1
病名：アルツハイマー型認知症・適応障害（対人障害）
周辺症状：被害妄想・作話・不穏・帰宅願望
服薬：ルネスタ錠 2m g ・メマリー錠 5mg・テトラミド錠 10mg・レサルティ錠 1mg
アリセプト D 錠 5mg・スルピリド錠 50mg・センノシド錠 12mg・リスペリドン内容液分包 0.5mg
性格：穏やか、口数が少ない
家族構成：妻・娘（主介護者）

【出会い】

令和 1 年 11 月担当者会議の席で A 様と出会った。被害妄想が激しくなった事により、それまで利用していたデイサービスの利用も出来なくなり、閉じこもり状態になっていた。また、訪問看護の担当看護師・ケアマネージャーの交代も同時期にあり、心身共に不安定な状況がより一層深まっていた。

そんな中、認知症専門の柔軟な対応のできる認知症対応型デイサービスを利用したいとの相談から、12 月 1 日スーパーデイようざん栗崎の利用へとつながった。

【利用当初】

ケアプランでは、月・水・金の週 3 回、朝 10 時頃から 15 時半頃帰宅で開始となった。利用を開始してみると、予定通りの時間を過ごせたのは、初めの 1 週目の月・水・金の 3 日間のみだった。

その後、我慢の限界を超えてしまったかのように、来苑しても 1～2 時間経つうちに被害妄想や頭部の火照りが激しいなどの身体症状が出てしまい落ち着いていることが出来なく

なった。さらに帰宅願望が強くなって「帰りたい・帰らしてくれ」と頻回に訴え、帰宅せざるを得ない状況にて帰宅をするという状況が 4 日ほど続いた。

その後は、閉じこもりがちになり利用できない日々が始まった。

周辺症状が激しくなりだしてからは、担当の訪問看護師と連携を図り体調の不安を相談し、どのような対応をすれば安心して穏やかに過ごせるかを、毎回アドバイスを受け実施した。また当施設の機能訓練士は看護師でもある為、看護師を信頼している A 様の相談役となり、身体状況の相談を受けたりもした。

しかし、A 様の精神状態の安定につなげることは出来ず、被害妄想と不安と体調不良の日々が続いた。介護者である娘さんからは、「体調不良の為、今日は利用を中止します」と毎回電話連絡があった。

【訪問開始】

A 様の休みが続いている現在の利用状況を打開する為に、1 月中旬にカンファレンスを行った。“行かなきゃいけない”という A 様の心理的な負担・毎回休みの連絡をするという家族の負担を考え、利用する時だけ連絡して貰うことにした。そして毎週金曜日、午前 9 時半～10 時の間に自宅訪問をすることにした。定期的に訪問を行うことにより、A 様が信頼し安心できる関係を構築することを目標とした。また訪問時、家族(妻・娘)の想いや悩みを傾聴し、寄り添える関係を目指した。A 様は対人障害もある為、慣れるまで専属のスタッフを決め、全ての窓口となり対応した。不安感や申し訳ないという気持ちが強い A 様に合わせ“近くまで来たついでに元気な顔を見に寄った”というスタンスで、時間も 5 分程の短時間で行い、とにかく A 様の気持ちに寄り添えるよう対応していった。

訪問時は、ユマニチュード・パーソンセンタードケア・バリデーションなど介護の技法を用いて接することも心掛けた。手を握る・握手をする・肩に手を当てるなどさりげなく触れながら安心できる声掛けや「無理しなくていいんですよ」「来たくなった時にいつでも来てください」「調子の悪い時は気兼ねせずゆっくり休んでください」などと短い会話を重ねた。

家族には自宅での様子や出来事など、些細な変化を聞き取りながら、その都度変化に対応した。

【経過】

訪問を始めて 2・3・4 月と 3 ヶ月が経過した。その間、2 月は自宅で転倒し手を怪我した為、看護師に診てもらうという名目で 3 回程来苑出来た。3 月は 1 回来苑出来たが、いずれも被害妄想や帰宅願望が激しく短時間利用で帰宅した。家族は自宅で一人にしておく事が心配で、何とかデイサービスに行って欲しいという要望があり、A 様も「行かなくて申し訳ない」「何とか行きたいと思っているが行けない」と訴え、苦しんでいる様子が伺えた。4 月は 1 回も利用が無かった。A 様の様子が被害妄想・不穏・不安の他、疑心暗鬼・勝手に出歩くなど、ひどくなっており、娘・身体不自由の妻・近隣に住む親せきの叔母や叔父・長男

など縁故者総動員して見守りをしている状態であった。

【変化】

A 様の状態がひどくなってきている事について、スタッフ間で再度カンファレンスを行った。訪問は継続し、対人障害がある A 様がデイに来やすくなるよう、利用者が少ない日曜日に利用することも提案した。しかし 5 月に入っても、便秘による苦痛の訴えがあったり、前日の夜は行く気であっても当日の朝になると「やっぱりダメだ。」と来苑出来ないことが続いた。そんな A 様が 5 月の末の訪問時、「一人は寂しいよ…。」とぽろっとこぼされる事があった。それは A 様の素直な気持ちであり、スタッフに心を開かれた瞬間でもあった。

その日を境に A 様がデイに来苑される日が増えてきた。

【役割の獲得】

6 月からは平均週 3 回利用が出来るようになってきた。A 様は畑仕事が得意で、スタッフにアドバイスをしたり、他の利用者様と一緒に畑作業を楽しむ事も出来た。畑仕事という役割を獲得したことにより、デイで自らの存在価値を見出す事が出来たのである。来所時はスタッフが終日付いて個別対応を行っているが、予定通り 9 時から 15 時半まで利用出来る日も増えてきた。表情も以前は見られなかった柔らかく穏やかな笑顔が見られる事が多くなっている。

また、利用中に 2 日続けて排便をすることが出来た。便秘による体調不良で悩んでいる A 様にとって、この事もデイが“安心できる場所”と印象づける大きな出来事であった。翌日も「ようざんに行くと便が出て調子が良いから、今日も行くよ！」と来苑された。

A 様の利用は、時折体調不良で休まれたり、短時間で帰宅される事もあるが振替利用で来苑されたりと長期休みにならず、今も利用は続いている。

【結果】

・便秘による周辺症状（被害妄想・不安・疑心暗鬼・猜疑心）
・適応障害（対人障害・特定の人にこだわる・うつ）
・帰宅願望　　などの課題に対して、実践の中から解決策を試みることができた。

【考察】

12 月に利用を開始してから休みがちで、短時間利用しか出来なかった A 様が、半年後に何故利用が出来るようになったのか。きっかけはやはり、「一人は寂しいよ…。」とスタッフに打ち明けてくれた事だと考えられる。訪問を繰り返し、スタッフと顔見知りになり、心情を吐露してくれるようになるまで、半年という時間は必要な時間だった。それは、不安感が強く、対人障害などの適応障害で悩む A 様の信頼を得る為の期間ともいえる。A 様からの

信頼を得て、デイサービスが“安心できる場所”と思えるようになった理由として、“行かないといけない場所”というプレッシャーから“行きたいときに気軽に行ける場所”に認識が変わった為と思われる。この認識も訪問時「来たくなった時に、いつでも来てください。」と繰り返し伝え、励ましていた事が A 様の不安の一つを取り除いた。もう一つの理由はデイのトイレで排便が出来た事である。A 様にとって、便秘は体調不良の原因であり、不安の根源でもある。A 様自身も「ここはトイレが近くに複数あって良いね。」「トイレを気兼ね無く、ゆっくり使える。」「すぐに行けるから、安心して来れるよ。」と発言をしている。

また、畑仕事という役割との出会いも A 様の来所への想いを前向きにさせた。元々、畑仕事は実家でよくしていたそうで、畑の事を聞くと普段は口数の少ない静かな A 様が、次から次に畑の話をして止まらなくなる。娘さんからも「デイで畑仕事をしている事は通い続けられる良い刺激になっているようです。」との言葉を頂いた。

A 様から得た信頼とようざんへの安心感を持ち続けて貰うことが、今後の利用についても重要になる。例えば精神的に不安定になって帰宅願望が出たり、体調不良があった場合などに無理して引き止めず、A 様の意志を尊重し希望通りに帰宅して頂くなどである。A 様のデイサービスへの期待を裏切らず、信頼関係を高めていく事が、A 様の精神的安定にも繋がっていく。

【まとめ】

A 様は適応障害・認知症の様々な周辺症状により、悩み・苦しんでいた。周囲のサポートが必要にも関わらず、なかなか人から理解されず、その事で更に苦しむことになる。A 様の事例を通して、その人のペースを大事にして、寄り添うケアの大切さを改めて学ぶことが出来た。人を理解するという事。その為には、まず何をするべきかを真剣に考え、行動する事がその人に近づく為の第一歩だと感じた。介護者の行動一つで利用者様の世界を閉じる事もあれば、広げる事も出来る。だからこそ、私達は責任を持って利用者様と向き合わなければならない。これからも利用者様の状況・状態・思いに寄り添ったケアを行い、安心を感じて貰いたい。デイに来る事にも慣れてきた頃、A 様が「今が一番良い時だよ。」と言った。あの時の穏やかな笑顔が今も心に残っている。

「もう帰っていいんかね？早く帰りたいよ」

スーパーデイようざん貝沢
発表者　結城順子

【はじめに】
スーパーデイようざん貝沢を利用されている方の中に誰とでも仲良く接することができ、周辺症状が強く現れている方を見ても偏見を持たず、介護している私達に対し「大変ですね」と労いの言葉を掛けてくれる A 様。また、初めてのデイサービス利用で不安そうにしている方を見ると「ここの人はみんな優しいから大丈夫ですよ」と積極的に声を掛けに行ってくれるすごく優しい方です。
若干の短期記憶障害はありますが、聞きわけがよく介護慣れしていて特に何の問題も無いように見える A 様がある日、遂に不満を口にされました。

【利用者紹介】
氏名：A 様
年齢：93 歳　女性
要介護度：２
既往歴：アルツハイマー型認知症、洞不全症候群（ペースメーカー挿入）
性格：心優しく、どの人にも当たり障りなくお付き合いができるが頑固な一面もあり。特に入浴に関しては気乗りしないと強い拒否がある。

【生活歴】
高崎市に６人弟妹の長女として生まれ、幼い頃から自分より小さい弟妹の面倒をみてきた A 様。２３歳で結婚し子供を１人授かったが、ご主人が若くして病気で他界。その後は働きながら一人で子供を立派に育てられる。幼い頃、父親に「人の悪口は絶対に言うな。嫌なことがあっても我慢しなさい。」と強く教えられたことで、協調性があり社交的で誰からも好かれていた。
現在は孫やひ孫にも恵まれて楽しそうに過ごされる。

【利用の経緯】
H25 年に洞不全症候群と診断されペースメーカーを挿入。それ以降物忘れが見られるようになり、特に物の置き忘れが目立つようになった為 H２６年２月に A 医院を受診。その際の MMSE は２０点。一時経過観察としたが、その後物忘れが増悪した為アルツハイマー型認知症と診断され抗認知症薬の投薬を開始。認知症になる前は地域のサロン活動へ積極的に参加する社交的な方だったが、認知症になってからは地域交流もしなくなり家から出る機会が少なくなってしまった。そのため、A 様が今までのように他者との交流と社会参加が

できる様にようざんへ相談し、利用となる。
利用開始当初は並榎のスーパーデイに通っていたが、事業所の閉鎖に伴い令和元年の１０月にスーパーデイようざん貝沢に移られる。並榎の事業所に通っていた頃から中心的な存在であり職員はもちろん、他利用者からも信頼は厚かった。

【課題】
週４回利用されるうち、水曜と木曜は利用時間が長く夕食を食べてから帰宅する。現在夕飯を食べて帰る方は A 様だけであり、そのため夕方になり他利用者が帰り始めると一人ぼっちになってしまい落ち着かない様子が見られ、帰宅願望が現れる。普段は温厚な A 様だが、不安になると自分の荷物を持って玄関から離れようとせず「帰らせてよ」「もう来ないよ！」と普段の A 様からは想像もつかない程興奮され、職員の声が耳に入らなくなってしまう。
長時間利用される日でもいつもの A 様らしく過ごして頂くにはどうすれば良いか。

【取り組み】
夕方の帰宅願望を無くすため、まず普段の A 様の様子をよく観察し本人が遅くまでデイを利用していても「楽しい」と感じる事は何かを考えた。

A 様は…
①物事への集中力が高く、興味を持ったことに長時間取り組んでいられる。
②人と会話することが好きで、話しを聞いてくれる人がいると嬉しそうに話をしている。
③レクには積極的に参加され、特に車に乗ってドライブすることが好き。
以上の事を踏まえ、夕方の不安な様子が現れる前に取り組める事があるかを考え実践する。

①に対し、得意な事や好きな事に関しては長時間取り組めることを考慮し、塗り絵や制作、パズルゲーム、洗濯物たたみなどを提供すると一定時間集中して取り組むことができた。
②に対し、他者との談話に関しては、夕方になると他利用者が帰ってしまい話し相手が居なくなってしまうので、手の空いている職員が集まり A 様を囲んで談話する。この時に A 様の若かった時の苦労話などを伺うとより効果的だった。
③に対し、外出は好きだが散歩に誘うと「疲れるから行かない」との訴えがあった。また、夕方なので体を動かす運動系のレクも「こんな時間に運動なんかしないよ」と拒否される。そこで他利用者の送迎と A 様のドライブを兼ねて気分転換に外出を計画。特に花が咲いている場所や神社仏閣巡りが好きなので、行き先に配慮すると「いいドライブが出来て良かった」と喜ばれていた。
その他に時計の針を送らせてまだ時間が早いと思わせる、職員が事業所に飼っている犬を連れて来ているので、犬と関わる時間を設け、寂しさを感じさせないようにする。

【結果】
どの取り組みも１つだけでは時間を持て余してしまうので、ドライブから戻ったら塗り絵を行う、職員との談話中に帰宅時間を気にし始めたら洗濯物をお願いする…など、いくつかを組み合わせて提供することで夕方以降も穏やかに過ごすことができるようになった。

【考察とまとめ】
A 様は普段何事にも一生懸命取り組んで下さるし、何でも出来てしまう。穏やかな時は全く手がかからない方なので私達職員はついつい A 様に対する関わりがおろそかになり、A 様が感じていた「寂しさ」に気付いてあげられていなかったのかも知れません。
今回の取り組みで分かった事は、手が掛からないと思っていた A 様も独りになってしまえばやはり心細いし、帰りたくなってしまうのは当たり前であるという事。その思いを“手が掛からないから大丈夫だろう”“まだ帰宅時間ではないと伝えれば理解してもらえるだろう”と過信してしまい、不安にさせない為の取り組みが出来ていなかった事が強い帰宅願望を引き起こしてしまった事の原因であると痛感しました。
これからは A 様がずっと笑顔で楽しく過ごせるように、ご本人の気持ちになって優しいケアを心掛けて行きたいと思います。

その人らしさを活かしたケア

スーパーデイようざん小塙
発表者：関口美穂
本間恵里

◆はじめに

「会社から自宅への帰り道がわからない」「直前の行動の記憶がない」「普段やっている仕事の手順がわからない」皆さんは、自分や家族がこんな状況に陥ったら、どのように感じますか。忘れる訳がないと思えるような“日常の当たり前”が自分の中から消えていくなんて想像することさえ難しいかもしれません。

このような認知症の症状が、若くして現れたＡ様の事例をご紹介します。

◆事例対象者

利用者様：Ａ様（要介護３）　女性
年齢　　：６０代後半
既往歴　：腎臓結石（２度)、緑内障、若年性アルツハイマー型認知症
生活歴　：中学卒業後、洋裁学校へ進学。縫製の仕事、ボーリング場勤務後に結婚。離婚後、整形外科に８年、工場に２０年以上勤務され、６０歳で退職後専業主婦。次女が中１の頃より約３０年間、内縁の夫と同居している。夫が本人の面倒を見ており、家事の大半を行っている。夫は自営業のため、日中独居となる。多趣味で、着装講師一級資格、書道七段を持っており、絵も描かれる。絵は日本画県知事賞を受賞するほどであった。また、昔は山登りや社交ダンスも行っていた。

◆利用に至るまで

Ａ様は６３，４歳頃から認知症状が見られる。夫や姉妹、娘に対して被害妄想があり、同じ話を繰り返すようになる。1日２０回程、姉や娘に電話を掛ける。「実家に帰る」と言い、夫の制止を振り切り道に迷い警察に保護されることもあった。また、夫の職場で自損事故を起こしても、その記憶がなくそのまま帰宅される。

認知症発症前のＡ様は、家の一部屋をアトリエとして使用し、こもって日本画に没頭することが多かったが、今では無気力となり、アトリエに入ることすらなくなってしまったとのこと。以前の几帳面さも今はみられない。日中、夫の会社に何度も行ってしまうようになり、ご家族からのデイサービスの希望があった為、平成３１年１月からスーパーデイようざんを利用されることになる。系列のデイサービスを数か所併用され、現在スーパーデイようざん貝沢と、スーパーデイようざん小塙の利用に落ち着かれる。

◆ケアマネジャーからの情報

サービス利用当初からこれまでの様子として、ケアマネジャーから以下の情報をいただいた。

①デイサービスの利用を始めてからも、妄想や幻覚の症状から、近くの病院に何度も行き、「絵の教室を予約しました」「今日は講師で」等と言われる。

②抑うつ症状等も現れ、「首をつりたい」という発言もあった。

③デイサービス内で、「賭けマージャンをしている人がいる」と言われ利用ができなくなる。

④１か月ぶりにサービスを利用されると、認知症の進行と共に眼窩がくぼみ、顔つきに変化があった。

⑤絵具を口に塗り、服装や髪が乱れた姿で近くの病院の受付に来た。そこで、「病院なのに賭けマージャンをしている」としきりに訴えられる。

◆利用を始めて見えたＡ様の様子

利用開始後直ぐに来所拒否や帰宅願望がみられ、次第に入浴拒否や妄想等も現れ始めた。短期記憶障害も顕著にみられ、何度も同じ話をされる。ご自分の歳や生年月日もわからない状態である。反面、他利用者様にご自分から話しかけられ、お話好きな一面もあり調子の良い時には、絵や山登りについてとても嬉しそうに話してくださる。また、世話好きで他利用者様を気遣う様子も伺える。体操もお好きで、積極的に参加され職員と一緒に前に出て、お手本になる場面もみられる。

◆課題と取り組み

Ａ様の人柄や様子を踏まえ、課題に対して以下の取り組みを行った。

①来所拒否

【課題】お迎えに伺うと、「今日は調子が悪いの」と体調不良を始めとする、様々な言い訳をされ拒絶されることがある。声かけに聞く耳を持たず、時には興奮され歩いて家から離れてしまう。夫は先に仕事に出られるため、協力を得られない状態である。

【取り組み】

・「荷物を預かっている」「絵を教えてほしい」と声かけを行う。

・自営業の夫が時間の都合をつけられるということで、来所拒否がみられた時は、夫に連絡し車で送っていただく。

・夫の送迎でも表情が険しく、口調が強いこともあるため、次の段階として夫に家に居ていただき、送り出しの協力をお願いする。

②入浴拒否

【課題】「アレルギーがあるから」「家で入ってきたから」等の発言がある。脱衣途中で気が変わり、下着姿のままホールに出ていこうとされる。脱衣ができたとしても、浴室内で「やめて！」と大きな声を出され、抵抗されることがある。特に洗髪に強い拒否がみられる。

さらに上衣をズボンのように履いていたり、下着を身に着けていなかったり、ジーンズを２枚重ねに履いている等の着衣失行もみられる。

【取り組み】

・以前利用していたデイサービスでの声かけと統一し、始めは「新人で勉強中なので、モデルになってほしい」と声かけを行う。

・拒否が強い場合、無理強いはせずにＡ様の意思を尊重する。

・Ａ様の興味関心を職員同士で共有し、会話に集中されている間に脱衣介助を行う。

・着衣失行の様子から、「反対になっているみたいなので、直しませんか」と声かけをし、入浴につなげる。

・職員が入浴着に着替えるタイミングでお誘いし、Ａ様の脱衣に対しての抵抗感を減らす。

・アレルギーから洗髪に対する恐怖感があるので、「無添加のシャンプーですよ」と声かけして行う。

③妄想

【課題】表情が険しくなり他利用者様の衣類や持ち物を、自分の物だと言われたり、所持品を盗まれたと言われたりされる。また、施設の備品を自分の物だと言われることもある。

【取り組み】

・物がなくなったと言われた場合、「見つけたら教えますね」と声かけをしたり、ホール内やロッカーを一緒に探したりする。

・自分の物だと言われた場合、否定せずに受け入れ、別の会話をして物から意識を逸らす。

・Ａ様の目の届く所に、他利用者様の物や施設の備品を置かない。

④帰宅願望

【課題】来所されても、「家で子供が待ってる」「娘が来るから帰る」と言われ、すぐに帰宅願望がみられる。一時は納得されるが、他利用者様がお帰りになるとさらに強

くなる。興奮が冷めない時は、「開けてちょうだい」「警察呼ぶわよ」とホールのドアを無理矢理開けようとされることがある。

【取り組み】

・その都度「送っていくことになっているので大丈夫ですよ」「ちょうどお家の近くまで行くので、一緒に行きませんか」と声かけをする。
・相性の良い利用者様と席を近くにし、話し相手になってもらうことで、安心していただけるような環境作りを行う。
・A様の表情や行動を観察し、変化が見られた時にご家族について話題を振り、ソファでゆっくりしていただきながら職員と会話をする。
・他利用者様と一緒に食器拭きや洗濯物干しをお願いする。
・ご本人に社交ダンスを教えていただき、一緒に踊る。

◆結果

これらの取り組みに対して、職員が対応しても次第に興奮されたり、作話を話されたりすることが多い。時には職員に土下座をして、ご自分の希望を通そうとされることもあった。認知症の進行のために、妄想が強く現れ、感情の起伏が激しく、怒ったり泣いたりされることもあった為、ケアマネジャーとご家族の話し合いにより、物忘れ外来の受診、内服薬の変更も行われた。

その後は以前と比べ、穏やかな様子が多くみられるようになった。今では、ご家族の送り出しにより、ドライバーのお迎えで来所することができている。入浴では抵抗なく、「悪いですね」「ありがとう」という言葉が聞かれるようになった。不穏になられることはあるものの、職員の声かけによりすぐに納得されるようになり、帰宅願望の強い利用者様の話し相手になっていただくことで、その方も、ご本人も状態が落ち着いた。また、他利用者様が困っている様子を見かけると、「どうしたの？」と声をかけてくださる。足の痛みがある利用者様に対しては、「私、整形外科に勤めていたの」「ちょっと見せて」と言われ、A様の姿に変化が見られた。

◆考察・まとめ

若年性アルツハイマー型認知症は、高齢者に比べて進行が速く、月単位で症状が進むことがあると言われている。しかし、認知症により低下した機能以外に、まだ高度に保たれている機能やご本人の自尊心も強くある。A様も同じように急激な症状の変化が見られたが、体力もあり活動的な一面もある。取り組み後の変化として、ご自分のもっている知識や経験を生かして、他利用者様に関わっている場面がみられた。他利用者様のお世話や、作業等をお願いすることで、ご本人のもっている能力を活かせるということがわかった。前へ出て体操をされている姿や、他利用者様にアドバイスをされている姿は自信に満ちて、生き生きとさ

れていた。他利用者様とは、親子程の年齢が離れているが、大きな混乱もなく落ち着いて一緒に過ごすことができている。A様なりの役割をもち、行動することが良好な関係を生んでいると思われる。A様の症状の進行によっては、今後ショートステイ等の、他のサービスを利用する可能性がある。A様がどこにいても不安なく、笑顔で過ごせるように、他事業所と連携して、統一したケアを心掛けていきたい。

A様のように若くして認知症を発症された場合、若年性認知症専門の施設はほとんどない。高齢者と同じサービス、施設を利用せざるを得ず、本人が生きがいを見出せる居場所の確保が困難となっている。発症からの経緯を伺った際、夫の口からあきらめの言葉が聞かれた。これまでのA様や家族の苦悩は察するに余りある。その上、先の生活にも希望が持てないとするなら本当の支援になっていないのではないだろうか。A様と家族のこれからがより良いものになるようなサービスを提供することこそスーパーデイの腕の見せどころではないか。その人らしさを支える若年性認知症の方の受け皿として、本人の支援や家族の精神的、身体的負担の軽減となるようそのニーズに応えていきたい。

「どこに行くのか分からないけど、まあいっか！」

スーパーデイようざん石原
発表者：石井洋子

＜はじめに＞

レクリエーション中「ワハハハ！」と豪快で、ひときわ楽しそうに笑っている。他のご利用者様の服装や制作の様子を見ては、「素敵なスカーフですね！」「上手に出来ていらっしゃる」等と、相手を立てて褒められる。職員に対しても「悪いですね。全く私は、ろくなもんじゃないから！ワハハハ！」と冗談を交えながら楽しい会話をして下さる。A様が笑われると、私達までつられて笑ってしまいます。

しかし１０ケ月程前までは、お迎えに伺うと布団から顔だけ出して「誰？」「何ですか？そんなところ行きませんよ！」「誰もそんなこと頼んでません！」「はい、おしまーい」と、けんもほろろに来苑拒否。どうにかこうにか奇跡的に来苑できたとしても終始不機嫌で「冗談じゃない！」「気持ちが悪い！帰りますから！」を連呼されている。レクリエーションや慰問にも参加されず、参加されている人達を見て「バカじゃないの？」と見下し、侮辱する仕草をされる。食事や水分についても「まずい！」と言って、殆ど摂取されない。

このように当初は頑なに心を開かず、誰とも交わろうとされなかったA様に対して、戸惑いながらも諦めず、携わり続けたことで変化が現れた事例を紹介致します。

＜利用者様紹介＞

氏　名　：　A様
性　別　：　女性
年　齢　：　８８歳
介護度　：　要介護３
既往歴　：　アルツハイマー型認知症、高血圧症、脂質異常症、不眠症、骨粗鬆症

＜生活歴及び利用の経緯＞

学校卒業後は、家業の染物工場のお手伝いをされていました。２０代半ばで取引先の呉服問屋に勤められていたご主人と結婚。実家のお隣に新居を構えました。まもなく授かった息子さんへの教育を大変熱心にされ、見事有名大学に合格。子育てが一段落すると、若い頃から続けていた華道と茶道の師範の資格を取得し、ご自宅で教室を開いていました。その他にも書道や絵画、お箏や三味線にも造詣が深く、それぞれの道を究めるべく、常にご自身も学んでおられたそうです。また地元デパートにもお勤めをされ、婦人服売り場で接客をされていました。その為か、普段からおしゃれも大好きで、今も決してズボンは穿かず、長い髪にロングスカートがトレードマークです。ご主人曰く「見栄っ張りで負けず嫌い。でも裏を返

せば、とても勉強熱心で頑張り屋。やり始めた事は最後までやり遂げる。
他人に頼らず何でも出来る、強くて華やかで社交的だった」とのことです。

そんなＡ様でしたが、１０年程前から徐々に会話や行動に認知症状が現れ始めました。それでもご主人が仕事をしながら身の回りの世話をして、二人で生活を続けていました。

しかし令和元年５月に、ご主人が大腿骨を骨折し入院されたことで独居状態となり、遠方に住まわれ、週に１、２回しか帰省することが出来ない息子さんがＡ様の様子をご覧になり、「独りでは生活出来ない」と心配され、６月からスーパーデイようざん石原をご利用頂くことになりました。

＜利用当初の様子＞

先ずは体験利用からとなり、当日の朝に職員がお迎えに伺うと冒頭に記した来苑拒否があり断念。帰省日に合わせて体験日を設定させて頂いていたこともあり、息子さんに状況を報告して午後に改めて息子さんご夫婦と一緒に来苑していただき、入浴だけして帰宅されることになりました。その際にもコミュニケーションを図る為に職員から「困っていることは無いですか？」とお聞きすると「困っていることなんか何もないから大丈夫です！」とキッパリと答えられ、警戒し他者の介入を強く拒んでいる様子が窺えました。その後も度々来苑拒否があり、何とか奇跡的に来苑されたとしても、終始不機嫌で誰とも交わらず、自分で何でも出来るとの思い込みから全てにおいて強い否定と拒否がありました。

８月には体調不良（意識喪失）で救急搬送となりました。脱水症で本来入院を要しましたが、意識が戻ると状況判断が出来ず、混乱して点滴を抜いてしまった為に、家に帰されてしまいました。この一件に加えここまで大きな進展も無い心苦しさと、持病と暑さからの体調不良の再発の懸念もあり、一刻も早く継続的にご利用して頂かなければと気持ちは焦るばかりでした。

そこで私達は課題を抽出し、それに対する取り組みを考え実践することにしました。

＜課題と取り組み＞

・課　題①　→警戒心を解き、信頼関係を構築する。

・取り組み　→先ずは安心と信頼関係を構築する為に決して押しつけや強引なことはせず、穏やかに、時にはユーモアを交えて根気強く携わりました。お迎えも来苑拒否があれば、日によっては職員が交代で３回伺うこともありました。

具合が悪そうだったり、困っていそうならば、たとえ水一杯でも汲んで置いてくる等、職員の顔や名前は認識出来なくても“緑色の服を着た人は悪い人では無い”ことを認識して頂くことに努めました。

また、それまでは、「息子さんに頼まれて」を多用しがちだったお誘いの文言も、ある日何気なく「息子さんが病院で待っていて、迎えに行けな

いから連れて来て欲しいと頼まれたので、一緒に行きましょう」とお誘いしてみたところ、ブツブツ言われながらも、これまでよりも格段スムーズにお連れ出しが出来たので、以降はこの誘い方で統一することにしました。

・課　題②　→食事と水分の摂取不足及び薬の管理と服用が出来ていないことに因る体調不良。
・取り組み　→血圧の薬を始めとする薬の飲み忘れや飲み過ぎを防ぐ為に、定期巡回事業所とも連携して、薬はご本人の目の届かない場所に変更し、自宅分については定期巡回事業所で配薬と服用を行い、ご利用日の朝と昼分は、デイサービスで管理し服用することにしました。食事や水分についても、途中で摂取を止めてしまおうとしても、急かさず穏やかにお勧めして、少しでも多く摂取して頂けるように努めました。

・課　題③　→自分で何でも出来るとの強い思い込みからの介護拒否。
・取り組み　→出来ることについては「お願い出来ますか？」と笑顔でお願いし、例えそれが不完全であったとしても、お礼と称賛の言葉を掛けました。また、拭ききれない・洗えないなどの不完全な部分については、「ちょっとお手伝いさせて頂いてもよろしいですか？申し訳ないですね」とお断りをして自尊心を損なわないように配慮しました。例えご本人が怒っていたとしても、ご本人と同じ高さに目線を合わせ、必ず笑顔で話し掛けることを徹底しました。

・課　題④　→他者と交わろうとされない。
・取り組み　→当初は他のご利用者様への言動を考慮して、少し離れた静かな席にしていました。しかし、これではトラブルは回避出来てもいつまで経っても他のご利用者様との交流が出来ず、デイサービス本来の楽しさも伝わりません。そこであえて相席にして職員が仲立ちをすることで、他のご利用者様ともコミュニケーションが取れるようにしました。

＜結果と現在の様子＞

今でもお迎えに伺うと相変わらず布団の中ですが、職員が「息子さんが病院で待っているので…」とのお誘いではなくても拒否無く来苑されています。入浴や排泄時にも「自分で出来ますから結構です！」と頑なだった介護拒否も無くなり「いろいろして頂いて、ありがとうございます。ここはみんな良い人だもんね！」「私、ここが好きよ」と仰って下さ

います。
　また、以前は「バカじゃないの？」と他者を見下す言動があったレクリエーションにも他のご利用者様とコミュニケーションを取りながら楽しそうに参加されています。
　体調についても薬の服用がきちんと出来たことで、血圧が安定して気分が落ち着かれた為か、食事や水分も摂取出来るようになり、体力がつき活動性も上がりました。更に最近では食欲も出てきて職員がお勧めしなくても「じゃんじゃん食べちゃおっと！」と仰りながら食事をされる正の連鎖も見られています。
　９月には入院をされていたご主人が退院されたことも安心感に繋がり、心身共にとても安定されています。

＜まとめ・考察＞
　認知症の方の怒りは、言いたいことが上手く言えない苛立ちや不安の表れだと言われています。私達もある日突然、見知らぬ人が家に来て「出掛けましょう！」と言われたら驚き、不安や恐怖を感じるはずですから、認知症の方なら尚更だと思います。でも私達なら訪問者とコミュニケーションを図り、情報を得て確認することが出来ますが、認知症の方には、それも困難です。「知りません！」「困っていません！」「行きません！」「結構です！」と怒鳴られ拒否されても、とにかく何回でも足を運んで声を掛けることで、この人達は悪い人では無いと安心され、徐々にではありますが信頼関係の構築に繋がり、危機的な状況から脱することが出来ました。
　今回も諦めないことの大切さや信頼関係の構築の難しさを再認識すると共に、気持ちが伝わり継続的なご利用に繋がった喜びを実感出来た事例を経験することが出来ました。

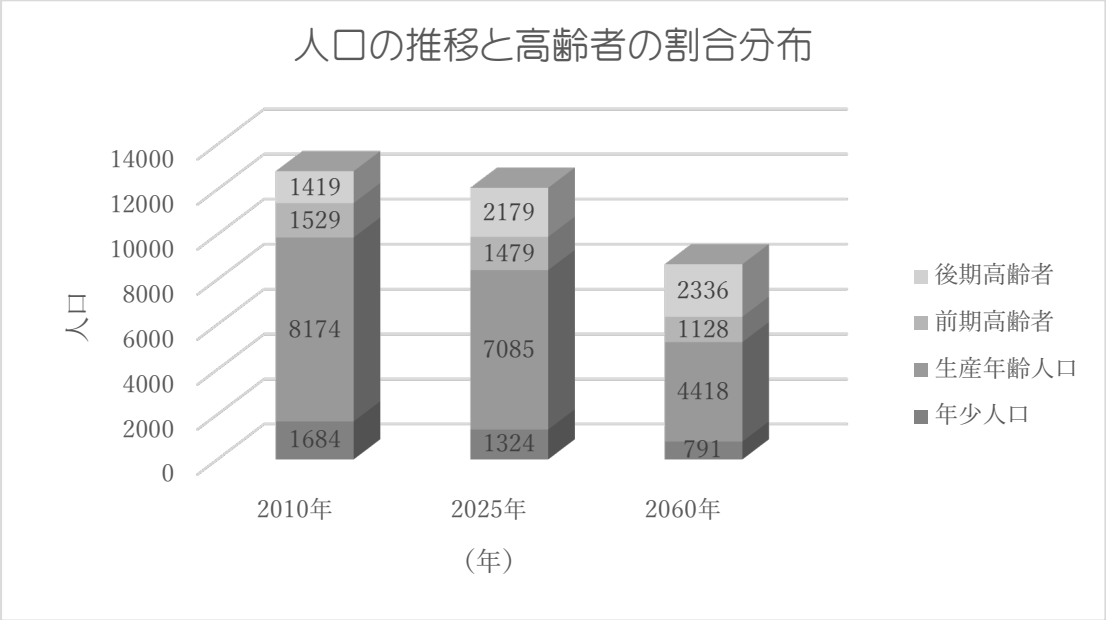
「おはようございま～す！ようざんで～す！一緒に行きましょう！」
「どこに行くのか分からないけど、まあいっか！（ワハハハ）」

『笑顔のさきに……』

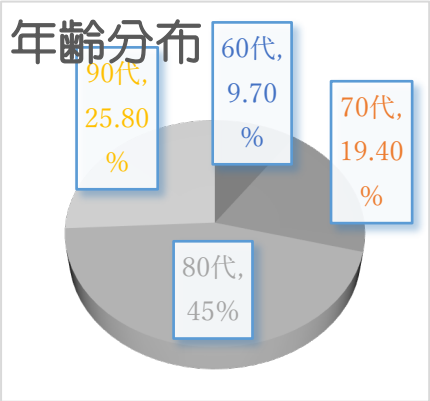
デイサービス　ぽから
発表者　清水　茂樹
北沢奈美子

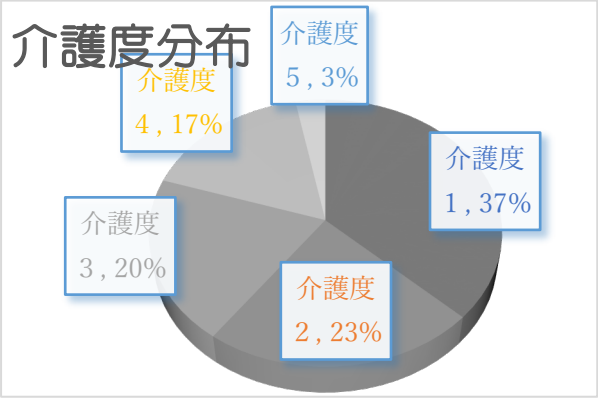
はじめに

介護の状況は、老老介護にはとどまらず認認介護の実態や、６００万人を超える団魂世代の高齢化、２０２５年には約３０万人程度の介護職員の人材不足等、様々な問題を抱えています。この様な状況の下、私たち介護職員はどのようにサービスを提供すべきか、考えていかなければなりません。



下記のグラフは、ぽからの利用者様の年齢及び介護度の分布となります。





今までの取り組み

薬物治療と非薬物療法、認知症には様々な療法があります。では、「デイサービスぽか

ら」での取り組みについて紹介いたします。
〖非薬物療法〗
【回想法】
　認知症の方には、「最近の出来事は忘れても昔の出来事はよく覚えている。」という事はよくあることで、利用者様の懐かしい思い出や出来事を引き出し、それを共有することで穏やかに心地良い時間を過ごしていただくこと。私たち職員は出来るだけ利用者様に寄り添い、時間の許す限りお話を傾聴するよう努めています。またその時に昔の写真等をきっかけ（利用）にお話をしていただくことも一つの選択肢となります。
　利用者様の主導でお話ができるので積極性や気持ちの安定を図る効果があります。

『売店ぽから（買い物療法)』
　少し、通常の買い物とは異なりますが、ぽから売店を利用して行っています。
まず、買いたい物（欲しい物）を確認（考える）する。
次に、商品（欲しい物）を見つける（探す)。
最後に、会計（支払う）をする。
　会計には、開設当初から使用している〈ようざん通貨〉を有効活用し、利用者様本人よりお支払いいただいています。
商品も、歯ブラシやお菓子、飲み物や衣類まで様々に取り揃え、利用者様の希望にそえるようにしています。
　脳への刺激を与え、達成感や満足感を得られる効果があります。

『ぽから農園（園芸療法)』
　植物を育てることによって身体、精神、知能等に良い効果をもたらしたり、損なわれた機能を回復することを目的として行っています。
　土の香りや、土から顔をのぞかせる緑の芽、日々成長を待ちわびる気持ちなど自然に触れ合い人間の持つ五感が刺激されることによって心に癒しが得られます。
　園芸作業は、歩く、座る、立ち上がる、耕す、草をとる、収穫などの動作を必要とすることで運動能力や体力の維持・増進の効果が期待できます。また、精神面でも満足感や達成感、気分転換やストレス発散効果や軽減、思考力や想像力の向上、記憶力の改善にも期待できます。
　今年の、「ぽから農園」はジャガイモ作りにチャレンジしていただきました。とても素晴らしい出来栄えのジャガイモを、利用者様に食べていただき収獲の喜びを共有していただく事が出来ました。
『作業療法』
　心と体のリハビリテーション効果が得られます。筋肉の動きなど身体機能や、集中力や判断力などの心理的機能を統合的に活用できます。目的がはっきりしているので、製作物

などの成果もとても解かりやすくなっています。
　認知症の方の多くは「体で覚えたこと」や「よくやっていた作業」等は失われにくい傾向があります。作業を行っていく中で、自尊心や自分らしさや安心感を回復します。

『運動療法』
　「デイサービスぽから」では、午前と午後に体操の時間を２回設けています。内容は余り形にこだわらず、利用者様に合わせて職員が考え利用者様に無理のないよう、また転倒等によるケガに注意しながら行っています。
　身体を動かすことで、寝たきりといった状態を予防し興奮などの行動障害や睡眠障害を軽減させる効果があります。

『音楽療法』
　おやつの後等の時間を利用して、昔懐かしい歌や、思い出の曲、唱歌などの音楽を使って心身をリラックスしていただいています。歌や音楽に合わせて鈴やカスタネット等でリズムをとったり、一緒に歌ったりしていただいています。
　これにより、不安やストレスの緩和を図り、身体能力の改善にも期待ができます。

新たな取り組み

　今、いくつかの新しい取り組みを実践しています。

『ぽから　皆勤で賞』
　職員のアイデアから生まれたこの取組みですが、「ただ、楽しく一日を過ごしていただくだけでなく、どんな小さなことでもよいから目的（目標）を持って来苑してもらえないかな？」この一言により生まれました。
　毎月、休みなく来苑していただいた利用者様のお名前を玄関正面に掲示させていただいています。玄関正面ということもあり、利用者様から「先月は、私は一日も休まずにここに来ることができたよ、ありがとね」といったご意見や「私の名前がここにないのは休んじゃったからだね、悔しいから今月は休まずにここへ来るよ」などのご意見をいただきました。
　全ての利用者様からというわけではありませんが、これが「目的（目標)」の一つとなっており、利用者様の生きがいの一つになっています。

　『ぽから　機能訓練室』
〈目的〉
　①　デイサービスぽからの特色作り。

② 利用者様が希望する住みなれた自宅での生活の継続。
③ 利用者様、職員の選択肢を増やす空間作り。

〈意図〉

デイサービスぽからの事業形態にあった、少人数ならではの個別性の高い機能訓練室を作ることが、「もっと運動をしたい」、「選択肢がなくなってきている」といった利用者様、職員のニーズに応えることで出来ることの幅を広げ、デイサービスぽからならではの特色をつくれると考えた。

〈結果〉

自宅での生活を続けていくための独自のリハビリメニューでリハビリをしたい方や、ゆっくりと話しをしたい方、気分転換のため環境をかえたい状況でも使用できる空間ができた。

これも、利用者様の目的（目標）になっており、運動能力や体力の維持・増進につながり、精神面おいても満足感・達成感・気分転換・ストレス発散等に効果が期待できます。

まとめ

まずは、楽しんでいただくという基本的な考えは継続し、どんな小さな事でも構いません、どんな些細な事でも構いません、何か目的（目標）をもって来苑していただけるようなサービスを利用者様に提供し、ぽからに来て本当に良かったと感じていただける施設づくりを目指します。

職員の様々な意見やアイデア、想いをかたちに変え、ぽからしい介護を目指します。

最後に

利用者様の笑顔の先にあるもの、それは「自分が自分らしく、いきいきとした生活を送ること」ではないでしょうか。

そんな利用者様のための、ぽからで有り続けていきたいと思います。